

# 宗門安心章

## 第一 信心帰依

万劫にも受け難きは人身、億劫にも遇い難きは仏法なり。われら今さいわいに受け難き人身を受け、遇い難き仏法に遇う、宿善のいたすところと雖も、仏祖大の恩徳に依らざるなし。いかでか歡喜し踊躍せざらんや。偏に信心帰依の心を発し、如説に修行をばげむべし。空しく一生を過ごして、永劫に悔を遺すことなかれ。信は道源功德の母にして、行善の本はすなわち帰依にあり。至心に合掌し、篤く三宝を敬うべし。三宝とは仏法僧なり。四生の終歸、万国の極宗、何れの世、何れの人か、この法を尊ばざらん。人尤だ悪しきは鮮し。よく教うればこれに従う。それ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直うせん。

恭しく大法の淵源をたずぬるに、世尊成道のあかつき、玉歩を鹿苑に運ばして、五比丘のために親しく四諦の法門を説きたもう。三宝この時始めて世に出ず。これを現前三宝と称したてまつる。

世尊ひとたび涅槃の雲にかくれたまえば、大衆悲泣哀恋止み難く、或は石に刻み、紙に写して、巍々たる光陽を末代に偲び、或は貝葉に記し、黄卷に録して、一代の説法悉く万世に伝う。又円頂方袍の比丘衆はたけく四弘の願輪に鞭うって、上座の真威儀を、五濁の末世に宛然したもう。みなこれ正法護持の悲願にしてこれを住持の三宝と名づく。

しかも三宝の実体は、元来人々自性の中に本具したれば、自ら自の覺性に帰依して、念念痴闇の心なき、これを帰依仏無上尊といい、自ら自の心法に帰依して煩惱邪見の心なき、これを帰依法離欲尊という。自ら自の柔軟心に帰依して、自なく他なく一切衆生と和敬隨順するを帰依僧和合尊という。もとより一体にして自性の靈妙を離れず、故にこれを一体三宝と名づく。上來三宝に三種の別ありと雖も、仔細に点検すればすなわち別異にあらず。偏にわが大恩教主釈迦牟尼仏の成等正覺に由来し、三世一切の諸仏諸尊も、南無釈迦牟尼仏の一念唱名の中には含まれたもう。されば

朝夕随所に南無釈迦牟尼仏と、一心に唱え至心に帰命したてまつるべし。

至心に帰命したてまつるが故に、今よりのち、

尽未来際、誓つて一切の邪魔外道には帰依せざるべし。

されば諸仏諸菩薩無辺の願海に撰取せられて、殊勝を求

めんと要せざれども、殊勝自ら至つて、光明不尽の

生涯を恵まるること決定して疑いあるべからず。

## 第二 自覚安心

悲しいかな、われら一念に悟れば直にこれ仏となるを知

らずして、却つて一念迷うが故に、自ら凡夫となりさが

る。かくも尊き仏法を耳にしつとも一向に、信心帰依の

心なく、生死の海に浮沈して、三毒五欲の妄念と

憎愛取捨の迷執に、日夜造業造作して、永劫出離の際

もなし。

たまたま信心おこせども、自心仏と知らざれば、ただ徒

らに狂奔し、傍家波々地に、仏を求め、法を求めて止む

ときなし。憐れというも愚かなり。

いずれの人も速やかに、善知識には遇いまつり、

無明長夜の夢を捨て、常楽涅槃に入相の、鐘に心をす

ましつ、菩提心をぞおこすべし。

そもそも諸仏出世の一大事因縁は、衆生をして、仏知見

を開かしめ、衆生に仏知見を示し、衆生に仏知見を悟ら

しめ、衆生をして仏知見の道に入らしめんがためなり

と、大聖世尊は示されぬ。

しかも靈山会上にて、梵天王が献じたる、金波羅華をば

拈じつ、破顔微笑を賞でたまひ、正法眼蔵、

涅槃妙心、実相微妙の法門を、摩訶迦葉にぞ伝えらる。

それよりの々相承し、二十八代菩提達磨大師をば、わ

が宗鼻祖と仰ぐなり。得々として南海に浮かび、

三千里外遠く大法を震土に伝え、黙々として、嵩山に

九年面壁なしたもう。祖師西来意、もとより梁王も識ら

ざるところ畢竟無功德。廓然として聖諦なく、隻履西

に去つてより杳として消息なし。然りと雖も、祖師もと

この土に来る、法を伝えて迷情を救わんがためなり。

不立文字、教外別伝、直に人心を指ぎして、見性成佛

せしめらる。大悲恩徳極みなし。

されば你ら言下に自ら回光返照して、更らに別処に求めざれ。身心と祖仏と別ならざることを知って、当下に無事なるべし。山僧が見処に約すれば、釈迦と別ならず。眼に在っては見るといい、耳に在っては聞くといい、鼻に在っては香を嗅ぎ、口に在っては談論し、手に在っては執捉し、足に在っては運奔す。この何をか欠少すと、宗祖臨濟禪師は呵せられたり。病何れの所ぞや。病不自信の所にあり。即今聴法底を識得すれば、自性すなわち無性にて、已に戲論を離れたり。不安の心を求むるに、不可得なりと徹してぞ二祖安心は得たまえる。寒暑にたがいに移れども、慧玄が這裡に生死は無しと示されぬ。日日これ好日、人人これ真人。行かんと要すれば即ち行き、坐せんと要すれば即ち坐す。餓え来れば飯を喫し、困じ来れば即ち眠る。ただ平常にして無事なれば、無事これ貴人と悟るべし。

### 第三 行事仏道

正法の道多途なれど、要約すれば、戒定慧の三学を出でず。三学は自の一心に帰し、定慧もと不二にして禅戒一如の妙道なり。

戒とは止悪修善の義、人人心地の様相なり。故に衆生仏戒を受くれば、すなわち諸仏の位に入る。位大覚に同じうし了る。まさに仏戒を受けんには、無始劫来の罪障悉くみな懺悔すべし。懺悔せんと欲せば、端坐して実相を觀ぜよ。衆罪は霜露の如し、慧日よくこれを消せん。已に懺悔し了れば、身口意三業清浄にして、方に菩薩の大戒を受くべし。

第一 殺生するなかれ。もろもろの生命あるもの、ことさらに殺すなかれ。自ら殺し、他をして殺さしむることなかれ。衆生仏性具しぬれば、すなわちいづれも仏子なり。いかでか殺すに忍びんや。

第二 偷盜するなかれ。吾等もとより空手にして、この世に來り、空手にして又歸る。一紙半錢たりと雖も、元來吾等に所有なし。わずかに可得の見あらば、すなわ

ち盗むと示されぬ。一切の財宝おしみなく、あまねく衆生に布施すべし。いかでか盗むに忍びんや。

第三 邪淫するなかれ。自性元来清浄なれば、行事もおのずか

自ら清浄なるを、梵行とは尊べり。たとい夫婦の中

中とても、淫らの所行あるなかれ。家庭はこれ敬愛の場

にして、子女養育の道場なり。これを乱すに忍びんや。

第四 妄語するなかれ。得ざるを得たりと誇り、到らざる

を到れりと説くことなかれ。直心はこれ道場なり。

行住坐臥に脚下を照顧し、愚の如く魯の如く、須らく

潜行密用すべし。自ら独りを慎しむべく、他を欺むくに

忍びんや。

第五 飲酒するなかれ。愚痴の酒を飲むことなかれ、

無明の酒に酔うなかれ。自性靈妙、主人公惺々として

覚めたれば、隨所に主となつて、立処皆真なり。自ら

自性を晦まして、他をして迷惑せしめんや。

かくの如きの菩薩の大戒、当に尊重し珍敬すべし。闇に

明に遇い、貧人の宝を得たるが如し。これはこれわれら

が大師なり。今身より仏身に至るまで、忝くも行持

して、懈怠の心なかるべし。

定とは坐禅三昧なり。外一切善悪の境界に向つて心念

起らざる、これを名づけて坐となし、内自性を見て動ぜ

ざる、これを名づけて禅となす。三昧とは正念相續な

り。行も亦禅、坐も亦禅、語黙動静安然として、專一

に己事を究明するは、坐禅の要諦にして、宗門第一の

行事なり。

慧とは智慧なり。仏智なり。自我の迷妄を脱却して、

不二に妙道に徹するなり。尽十方世界は沙門の眼、縦に

は三世を貫き、横には十方に瀾淪して、刹土としてわが

土に非ざるなく、瞬時としてわが時光に非ざるなし。今

この三界は悉くこれわが有にして、その中の衆生は皆

これわが子なり。

衆生病むが故にわれ又病む。慈悲愛憐せざらんや。

劫石たとい消するの日ありとも、わが願力は尽きざら

ん。尽未来際、報恩謝徳の思い、興隆仏法の志、

寤寐にも忘るべからず。